

日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究

吉川 敏子

(1) 研究課題および研究期間・種目

「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」(課題番号 18K00979)
平成30年度～ 令和2年度 基盤研究(C) (一般)

(2) 交付決定額(直接経費・間接経費・合計)

平成30年度	1400千円	420千円	1820千円
令和元年度	1400千円	420千円	1820千円
令和2年度	600千円	180千円	780千円
合計	3400千円	1020千円	4420千円

(3) 研究組織

研究代表者 吉川敏子(奈良大学教授)

研究分担者 田中俊明(公益財団法人古代学協会客員研究員)

坂井秀弥(令和元年度まで。奈良大学教授)

小山田宏一(奈良大学教授)

鷲森浩幸(帝塚山大学教授)

吉川真司(京都大学教授)

藤本悠 (奈良大学講師、令和2年度准教授)

この他、堀信行(東京首都大学名誉教授)、山中章(三重大学名誉教授)、清水みき(三重大学・奈良大学非常勤講師)、佐藤健太郎(関西大学博物館学芸員)の継続的な研究協力を得た。

(4) 研究の概要

1. 本研究課題の目的

日本の前近代社会において、馬はあらゆる場面で重要な役割を果たしていた。その生産・育成の場である牧の実態解明は、きわめて重要である。これまでの古代の牧の研究は、良馬の生産を目的とする大規模な地方の牧に関する研究が主であった。これに対して本研究は、馬の大消費地であり、政治・経済・軍事・交通・文化に重大な影響を与えた都周辺の牧の実態解明を課題とする。研究課題の広がりやを考慮して、研究分野の枠を越えた文献史学・考古学・地理学などの研究者が合力し、現地踏査を重視しつつ活動することで、牧の推定地の立地・地形・規模などの特徴を抽出する。その成果を集積して、都を取り巻く畿内・近国の牧の配置を俯瞰し、馬に依存した古代社会を、より具体的に理解するための方法を構築する。さらに、九州・東日本・韓国の牧の遺跡も踏査

することで、先行研究が乏しい都周辺の牧のイメージを補いつつ、その特徴を相対化するという視角も加え、近畿古代牧の実相を解明するための研究基盤の構築を目指す。

2. 研究活動の概要

2018～2020年度の科研費助成を受けた本基盤研究は、2016年に発足させた近畿古代牧研究会の研究活動をベースとする。同研究会は、清水みき、山中章、吉川敏子を発起人とし、吉川を代表者として活動を開始した。活動方針として、撰関期以前に起源を持つ畿内・近国の牧を研究対象とし、考古学・文献史学・地理学の各分野の研究者が協力して学際的な牧の研究を行うこと、研究会と現地踏査とを並行して行い、地域に根ざした研究を行うことを定めた。古代牧推定地が所在する自治体の文化財行政担当者と情報交換を行いつつ協力を仰ぎ、現地における古代牧研究への関心の喚起と活性化も目指した。また、研究会や巡見には参加資格を設けず、特に若手育成の観点から学生にも参加を呼びかけることとした。

かかる方針の下、研究活動を重ねて、個別の近畿古代牧の復元に努める一方、その相対化のためには、古代の馬産地である甲信・北関東地方や南九州の牧、および日本に乗馬の風習をもたらした朝鮮半島の牧についても理解を深めることが不可欠であることは、研究会発足当初から認識するところであった。そこで3カ年計画の科研費助成を申請し、その交付を受けて、2018・2019年度には遠隔地の現地踏査を実施し、3カ年目にあたる2020年度は、研究成果を整理し公開する段階にあてた。

3. 活動の経過

研究会においては、古代牧に関する法制史料を確認し、文献上の近畿古代牧のリストアップを行い(後掲)、個別の牧について考古学・文献史学・地理学の各方面から検討を進めるという方法をとった。不定期に研究会と現地踏査を行うことで、成果を共有しながら検討を重ねてきた。

助成金交付を受け、2018年度には山梨県と宮崎・鹿児島県、2019年度には韓国と群馬・長野県の巡見旅行を実施した。山梨・群馬・長野県では主に延喜式製の御牧の推定地を巡見し、埋蔵文化財調査員から調査成果の説明を受けながら、東国の古代生産牧の景観を理解した。宮崎では都井岬の在来馬の放牧の状況を学び、鹿児島では『日本三代実録』の廃止記事のみで名の知られる大隅国吉多牧・野神牧の遺称地の地形を確認した。都から離れた生産牧の立地・環境を実見し、それらと対比することで、備蓄を旨とする近畿古代牧の特徴を明確に理解し得た意義は大きい。その成果より着想を得た考証は、研究代表者の既発表論文に反映させている。また韓国では、文献や地名から牧の故地である可能性のある地を巡見した。古代に遡る牧の情報が未だ乏しく、現時点では日本の古代牧研究と直結する情報は得られなかったが、韓国で面談の機会を得た研究者に牧研究の意義を示す機会を得たことの意味は大きいと考える。今後、韓国での研究の進展により、日韓の牧研究の相互比較が可能になっていくであろうことを予感している。

2020年度は助成金を受けた研究の成果の集大成の時期にあてていた。折しも、コロナウィルス蔓延により、シンポジウムなどの開催は不可能となり、本報告書の編纂をもって成果の発表を行う運びとなった。本報告書には、研究会発足以来の活動記録と成果の概要を記したうえで、分担研究者や研究協力者の未発表の論考を収録する。研究会や巡見の開催を自粛せざるを得なくなり、共同研究としての活動が制約を受けているが、現在は研究会としての成果と今後の課題の整理に努めている。

以下、研究活動の継続性に鑑み、助成金交付以前の活動も含め、研究会発足以来の記録を時系列に沿って記載する。なお、研究会はいずれも奈良大学を会場とした。経費が発生しない研究会・巡見には、各方面の研究者や学生にも参加を呼びかけ、参加資格は設けていない。旅費に助成金を充当したものには★を付す。既述の研究者以外についてのみ、発表当時の所属等を付記する。

- 第1回研究会 2016年4月21日
吉川敏子「近畿の古代牧の概要」
- 第2回研究会 2016年5月19日
吉川敏子「垂水牧故地巡見事前学習」
【巡見①】 2016年6月6日 摂津国垂水牧推定地(大阪府吹田市)
【巡見②】 2016年6月11日 摂津国垂水牧推定地(大阪府吹田市)
- 第3回研究会 2016年7月21日
山中 章「秦初期の牧と日本古代の牧 ～地形にみる牧の基本構造(予察)～」
- 第4回研究会 2016年9月2日
吉川敏子「河内国坂戸牧研究の予備学習」
【巡見③】 2016年10月10日 河内国坂戸牧推定地(大阪府柏原市)
- 第5回研究会 2016年11月17日
清水みき「垂水牧推定地の巡見を終えて」
吉川敏子「坂戸牧巡見総括」／「畝野牧の予備学習」
- 第6回研究会 2017年1月20日
田中香里(奈良大学大学院)「古墳時代における馬の利用と生産及びその背景」
【巡見④】 2017年3月14日 河内国坂戸牧推定地(大阪府柏原市)
- 第7回研究会 2017年3月17日
吉川敏子「為奈野牧巡見の予備学習」
山中 章「為奈野牧の比定」
【巡見⑤】 2017年4月23日 摂津国為奈野牧推定地(兵庫県伊丹市)
- 第8回研究会 2017年6月3日
三野拓也(京都大学大学院)「辛島牧の基礎的考察—機能・組織・立地—」
小山田宏一「伊丹市荒牧雑感」
- 第9回研究会 2017年7月15日
鷲森浩幸「倭馬飼(室原馬飼)について」

- 【巡見⑥】 2017年9月3日 摂津国畝野牧推定地(兵庫県川西市)
 第10回研究会 2017年10月28日
 吉川敏子「右馬寮領摂津国豊島牧と勝尾寺結界」
- 第11回研究会 2017年12月9日
 田中俊明「新羅の牧を考えるために」
- 第12回研究会 2018年2月7日
 鷺森浩幸「倭馬飼(室原馬飼)について(その2)」
- 【巡見⑦】 2018年3月24日 大和国室原牧推定地(仮称。奈良県郡山市・天理市)
 【巡見⑧】 2018年4月29日 摂津国豊島牧推定地(大阪府箕面市)
- 第13回研究会 2018年6月23日
 岡野慶隆(元川西市教委)「古代牧と温泉(鉱泉)の検討～畝野牧を中心として～」
- 【巡見⑨】 2018年9月10～12日 穂坂牧・真衣野牧・小笠原牧等推定地(山梨)★
- 第14回研究会 2018年11月8日
 吉川敏子「大和国宇陀郡の古代牧二題」
- 第15回研究会 2018年12月20日
 山中 章「薦生牧に関する基礎的報告～地形図から見た名張川流域の牧～」
- 【巡見⑩】 2018年12月27日 大和国桧牧推定地(奈良県宇陀市)、広瀬牧推定地(同山添村)、伊賀国薦生牧推定地(三重県名張市)★
- 【巡見⑪】 2019年3月26～29日 都井岬(宮崎)、野神牧・吉多牧推定地(鹿児島)★
- 第16回研究会 2019年5月30日
 吉川敏子「大隅巡見の成果報告」／「河内国辛島牧の予備的考察」
- 【巡見⑫】 2019年8月17～23日 韓国巡見(釜山・蔚山・慶州・ソウル)★
- 第17回研究会 2019年9月30日
 佐藤健太郎「鳥養牧について」
- 第18回研究会 2019年11月14日
 清水みき「摂津国垂水牧―始原と変遷―」
- 第19回研究会 2020年1月27日
 吉川真司「河内国楠葉牧の再検討―関係史料の整理―」
- 【巡見⑬】 2020年3月15～17日 黒井峯遺跡・金井東浦遺跡・中野谷地区遺跡群(群馬)、長倉牧・望月牧・塩野牧・新治牧推定地(長野)★

巡見にあたっては、次の方々に現地の案内や情報交換会の調整などのご協力を賜った(敬称略、ご協力の時系列順)。

藤原学(元吹田市立博物館)、安村俊史(柏原市教育委員会)、山根航(同)、中畔明日香(伊丹市教育委員会)、岡野慶隆(川西市教育委員会)、末木健(山梨県考古学協会)、室伏徹(同)、平野修(帝京大学文化財研究所)、佐野隆(北杜市教育委員会)、森原明廣(山梨県立博物館)、西田茂(元北海道埋蔵文化財センター)、世良田明呼(都井岬ビジターセンター)、前澤和之(群馬県地域文化研究協議会)、井上慎也(安中市教育委員会)、石

井克己(渋川市教育委員会)、右島和夫(群馬県立博物館)、飯田浩光(同)、福島邦男(佐久大学等)、堀田雄二(東御市教育委員会)

また、次の寺院・諸機関において、史料・遺物を特別に見学させていただいたり、情報交換の会場を提供していただくなどの協力を賜った。

吹田市立博物館、大阪府柏原市光徳寺、山梨県立博物館、南アルプス市教育委員会

この他、現地市民のご協力を賜ることもあり、各方面に深く感謝申し上げます。

4. 研究成果

本研究課題の研究代表者・研究分担者および継続的な研究協力者(近畿古代牧研究会参加者)による牧関連の研究論文は以下である。研究活動の連続性に鑑み、ここには助成金交付より遡り、研究会発足の2016年度以降の論文を掲載する。これらに、本報告書収録の各論文を以て、本研究の成果とする。

吉川敏子「河内国坂門牧の史料学的研究」『文化財学報』35、2017年

山中章「古代畿内に設けられた牧—為奈野牧を探る—」『絲海』42、2017年

吉川敏子「右馬寮領撰津国豊島牧と勝尾寺結界」『文化財学報』36、2018年

鷲森浩幸「倭馬飼とその牧」『帝塚山大学文学部紀要』39、2018年

吉川真司「日本古代のアブラナ科植物」(『アジア遊学』235、2019年)

吉川敏子「大和国宇陀郡の古代牧二題」『文化財学報』37、2019年

吉川敏子「河内国辛嶋牧についての考察」『文化財学報』38、2020年

山中章「薦生牧・廣瀬牧に関する基礎的考察」『三重大史学』20、2020年

吉川敏子「近畿の馬牧」(佐々木虔一等編『馬と古代社会』八木書店、2021年)

現地踏査にご協力をいただいたことがきっかけで、協力者が新たな課題を見出され、研究成果をあげられることになった論文があり、あわせて紹介させていただく。

安村俊史「坂戸牧考」『柏原市立歴史資料館報』31(2018年度)、2019年

西田茂「古代大隅国の吉多牧、野神牧を探して」(吉留秀敏氏追悼論文集刊行会『遺跡学研究の地平—吉留秀敏氏追悼論文集』2020年)

5. 今後の展望

近畿で大規模な生産牧が積極的に営まれたのは、おそらく王権の膝下で馬匹生産が始まった頃と、軍団への軍馬供給が必要であった7世紀末から8世紀末の2つの時代であっただろう。その時期を除けば、近畿の古代牧は遠国から供給される馬を利用の場面に備えて放牧しておく小規模な備蓄牧としての性格が強かったと考える。平安時代の幕開けを前に軍団制が廃止されると、もはや人口密度の高い畿内では大規模な牧は無用の長物となり、六国史に現れる牧は、殆どが廃止の記事である。『延喜式』には地方から供給され、都で飼育しきれない馬を放牧する8箇所近畿の公的牧・厩が規定されているが、牧の運営や実態に関わる史料は少ない。貴族の私牧も似たような状況であっただろう。古文書や古記録に牧の名が見られるが、耕作され荘園化したものも

多く、いずれも情報は断片的である。

史料に名が遺る古代牧を研究対象として成果を積み上げることを課題として研究活動を始めたが、古代の史資料は極めて乏しく、実際には中世以降の史料も集めて考察を進めてきた。中世以降の史料を紐解き、そこから遡って古代牧を考証するという視角が重要であることは身にしみている。3カ年の助成金交付により、遠隔地への巡見が可能となり、近畿古代牧を日本列島のなかで空間的に把握することに努めてきたが、今後は、近畿の牧に関する分析視角を積極的に中世以降に広げ、時間的流れの中で近畿の牧を理解していくことに重心を移したい。